

DV 家庭のなかで起きている動物虐待

— インタビュー調査からの事例 —

須賀 朋子¹⁾

Correlation between animal abuse and domestic violence
— Examining case studies from an interview survey —

Tomoko SUGA¹⁾
(Accepted 22 November 2023)

I. はじめに

日本の、動物虐待と対人暴力の関連性に関する最初の論文は、一般中学生と、少年院入所経験がある中学生に、動物虐待歴の有無を比較したものである。その論文では、少年院入所経験がある中学生が、統計的に有意に高く、動物虐待を経験していることの記述がある。このことから、動物虐待が、対人暴力へとつながっていることを指摘している¹⁾。日本の動物愛護法には、「①殺傷、②傷つけた者、③身体に外傷が生ずるおそれのある暴行を加えること、④給餌もしくは、給水をやめ、酷使し、その健康及び安全を保持することが困難な場所に拘束し、衰弱させること、⑤疾病にかかり、負傷したものの適切な保護を行わないこと、⑥遺棄することは虐待である」の記述がある²⁾。これらの事に対して、警察に相談や情報提供を行うことは、誰もができるが、「獣医師が、警察に通報をした情報は、虐待の有無、動物の状態、顧客等について詳細な内容を含むため、情報の取り扱いに、配慮した対応をする」と書かれている²⁾。動物虐待については、獣医師がとる行動までが、ガイドラインに書かれているが、動物虐待と対人暴力が近接にあることは、獣医師のガイドラインのなかで取り上げられていない。

アメリカでは動物虐待と対人暴力は、同時発生的に起きている報告がされている。理由として、暴力を振るう人は、家庭内の弱い者を傷つける傾向があることが、指摘されている³⁾。また、1983年の研究では、対人と動物の両方への虐待が報告された事例の55%が、少なくとも1回以上、獣医師の外傷によ

る診療を受けていることが明らかになっている⁴⁾。そこで、獣医師は動物虐待だけでなく、対人暴力の兆候にも気づくことができるユニークな立場にあることを指摘している⁵⁾。また、獣医師が動物虐待の疑いがあっても、行動を起こさない理由として、「虐待についての不確かさ、加害者からの報復、飼い主との関係を壊すことの恐れ、適切な行動への知識の無さ、裁判費用と時間の問題」を挙げている⁵⁾。行動を起こす理由として、「動物を苦痛から守りたい、動物と飼い主の、暴力や傷害を予防するため」を挙げている⁵⁾。

また、子どもの暴力因子として、動物虐待と放火を行った子どもは、成長してから重大な犯罪を起こす可能性があることを指摘し、獣医師と連携をすることによって、重大な犯罪を未然に防げるのではないかと提案している⁶⁾。理由として、行動に異常が認められる子どもの25%が「動物虐待の経験あり」、「動物虐待を見て育った」と回答している⁶⁾。

また、オーストラリアの獣医師を対象とした研究で、動物虐待を診察している獣医師は、「年11ケース以上」は4.4%、「年4-11ケース」は11.0%、「年1-3ケース」は41.4%、「年1ケース以下」は34.8%、「診断したことがない」は8.3%であった⁷⁾。このように、実際に、獣医師が、動物虐待であることを認識して診察をしていることが明らかにされている。

新しい調査結果では、アメリカのPALS (People&Animals Living Safely) が2021年にDV被害者側を調査している。DV被害者の49%が「ペットを置いて逃げるわけにいかない」と思い、29%が「加害者がペットを傷つけたり、殺そうとし

¹⁾ 酪農学園大学 農食環境学群 食と健康学類 教育発達心理学研究室
Rakuno Gakuen University, Ebetsu, Hokkaido, 069-8501, Japan
College of Agriculture, Food and Environmental Science Department of Food Science and Human Wellness, Educational Developmental Psychology Laboratory

ているのを見た」と回答している。23%の被害者が「ペットを獣医師に診せた」と回答し、76%のペットが、「暴力が原因で心身や行動に変化があった」と回答をしている。また、被害者にとって、ペットは91%が感情的な支えで、「シェルターに避難をするとしたら、ペットと一緒に過ごせるのはどのくらい重要か」、の問いには81%の人が「とても重要」と回答した。さらに、シェルターにペットと入れなければ、50%の人が「シェルターには入ることをあきらめる」と回答をしている⁸⁾。

海外の先行研究を鑑みて、日本でも、動物虐待と対人暴力は、同時発生的に起きているのかどうか、「ペットを飼っているDV被害者に、どのようなことが起き、どのような方法をとっているのか」を知るために、DV被害者と、DVシェルターの運営者にインタビュー調査を行うこととした。DV被害者と、DVシェルター側の現状を、獣医師に理解してもらうことにより、DV被害者の早期救出と予防、動物虐待防止、ゆえにOne Welfare（人と動物の健康）を促進していくことを目的とする。

II. 研究方法

1. 研究対象と分析方法

調査1では、DV被害当事者で、「動物への虐待も見た」という8名に、インタビュー調査を行い、ICレコーダーに録音（約5分）を行った。事例研究であるため、状況が理解できるように、逐語的に示した。

調査2では、7施設のDVシェルターの運営者に、「ペット同伴でシェルターに逃げてくる被害者に、どのような対応をしているか」を、インタビュー調査を行い、ICレコーダーに録音（約5分）を行った。

2. 倫理的配慮

調査1、調査2を行うにあたり、研究協力者に、研究の趣旨と協力の依頼を、口頭と文書で説明をした。研究協力は自由意志に基づき、任意性を保証した。インタビュー謝礼は図書カード2000円で実施した。本研究は、酪農学園大学人を対象とする医学系研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号22-5）。

III. 結果

1. 調査1

事例A～事例Hの8名の被害者を、5つのカテゴリー、【動物虐待、子ども虐待、DV、動物病院を受診した事例】(表1)、【動物虐待、子ども虐待、DV、動物病院を受診しなかった事例】(表2)、【動物虐待、

DV事例】(表3)、【動物虐待、デートDV事例】(表4)、【DV、女性がペットと離れられない事例】(表5)に分類した。

表1 動物虐待、子ども虐待、DV、動物病院も受診をした事例

事例A

父は、キレると、母や私（子ども）を叩きました。私が叩かれているとき、子犬が危険を察知して、「ワンワンワン」と吠え、犬の首をつかんで、床に叩きつけたり、投げていました。犬は、室内の小さい檻の隅に逃げて、小さくなっていました。犬が投げられる姿を見て、本当に怖かったです。犬は「痛い」とか言えないから、あとで抱きしめてあげるしかありませんでした。骨折をしていたので、動物病院に連れて行きました。獣医さんに「どうして怪我をしたの」と聞かれましたが、母は、「庭で、何かにつまずいたんだと思います」と、本当の事を言いませんでした。

事例B

私（女性）や子どもにも暴力はありました。子どもが子犬をもらって来て、世話をしていたのですが、夫が獣臭いことに腹をたてて、水に沈めて、殴って、血みどろにしました。夫の反対を押し切って、動物病院に連れて行ったら、夫がついてきて、「間違えて、車で引いてしまった」と獣医さんに言っていました。獣医さんは「そんなわけないでしょ」と一言、言ってくれましたが、私は、横に夫がいるから怖くて、本当のことを言えなくて黙っているしかありませんでした。最終的に1歳になる前に子犬はケージのなかで死んでしまいました。動物を見せしめにして暴力を振るう夫に怖くなり、子どもとシェルターに避難しました。

事例Aも事例Bも、妻と子供にも暴力があり、子どもの前で子犬を虐待している。妻が動物病院に連れて行って、獣医師に子犬を診察してもらっているが、怪我の、本当の原因は言えない状況にある。特に、事例Bの場合は、夫が動物病院までついてきて、妻が本当のこと（夫の子犬への暴力）を言えない恐怖感が示されている。さらに、事例Bの獣医師の「そんなわけないでしょ」という言葉は、動物虐待に気づいていることを示唆している。(表1)

表2 動物虐待、子ども虐待、DV、動物病院は受診をしなかった事例

事例C

夫は、私（女性）と子どもにも暴力を振るい、一番怖かったのは、目の前で、飼っていた猫を虐待（殴る、蹴る）して殺して、物干しにぶら下げました。その姿を、私や子どもにわざと見せて、見せしめにしました。その後、シェルターに避難しました。

事例 D

私（女性）にも、子どもにも暴力がありました。猫 2 匹を飼っていて、新築の家を建てたら、夫は猫が爪を立てて走ったりすると、猫の首を捕まえて 2 階の窓から外に叩きつけました。猫は、元夫が怖くて、足音や大声がすると、怖くて隣の家の物置に隠れていました。家族に対する暴力がひどくなって、子ども 3 人だけを連れて、シェルターに逃げました。子供たちは、猫のことが心配で、毎晩、泣いていました。3 か月後、シェルターを出て、生活保護でアパート暮らしを始めることができるようになったので、元の家に、猫を探しに行きました。「〇〇～」と子供が叫んだだけで、隣の家の物置から、猫が 2 匹とも出てきました。お隣さんが餌を物置で与えてくれていました。子供たちのためにも、猫が生き延びてくれていて、本当に良かったです。

事例 C, 事例 D は、妻にも子どもにも暴力があり、子どもが可愛がっていた猫を、子どもに、見せしめのように虐待している共通点がある。事例 C は殺している。いずれも動物病院にまで、繋げることはできなかった。(表 2)

表 3 動物虐待, DV 事例

事例 E

私（高齢女性）は、夫からの暴力で遠方からシェルターに逃げてきました。雌犬を外で飼っていたのですが、近所の雄犬が発情期のときに、吠えたり、寄ってくることもあり。そうしたら、その近所の雄犬を、シャベルで殴って殺しました。夫はバレないようにするために、穴を掘って雄犬を埋めて、何事もなかったように、仕事をしていました。

事例 F

私（女性）の祖父は、祖母を怒鳴ったり、叩いたりして、自分の言ったことを聞かないと暴れまわる人でした。祖父は猟をする人で、猟犬を飼っていたのですが、躰と称して、猟犬の頭を鍋で頻りに殴っていました。猟犬は頭が良いため、飼い主に逆らってはいけなと思っていますのか、向かっていくことはありませんでした。散歩もつれていかずに、コンクリートの小屋のようなところに入れて、そこから、出てこようとしていたり、吠えたりすると、鍋で殴っていました。

事例 E, 事例 F は、妻と動物に暴力があった事例である。事例 E は、近所の犬を殺した夫に対して恐怖を覚え、逃げる決心がついた事例である。事例 F の場合、孫にあたる女性が、祖父が祖母を叩いている姿をみていること、猟犬を叩いている姿をみて、祖父に恐怖感を持っている事例である。(表 3)

表 4 動物虐待, デート DV 事例

事例 G

私（女性）が、体調が悪くて、仕事を休むと、彼は「金にならない女」などと言ってきました。犬を飼っていて、「今日中に『お手』ができないと返品する。こんなバカな犬、いらぬから金を返してもらえ」と、店に電話をされました。犬が私に懐いていると、「犬を殴れ」、「犬を投げろ」と、私に命令をしました。暴力を拒否すると、「こんな犬も、お前もいらぬ」と言われました。

デート DV の関係の中で起きている、動物虐待の事例である。「犬を殴れ」、「犬を投げろ」と命令されたことに、怖くなり、シェルターに避難をしてきた若い女性の事例である。

表 5 DV, ペットと離れられない女性の事例

事例 H

夫は、私（女性）には暴力・暴言がひどかったですが、猫には暴力はありませんでした。世話（餌やトイレ）をすることもありませんでした。しかし、猫は私の大切な存在で、猫が心の支えでした。猫は、私が夫に殴られている姿を見ているので、夫が怒鳴り始めると、いつも家の隅の方に逃げて萎縮していました。猫も、私がいないと安心できませんでした。ペット同伴可のシェルターがあることを弁護士さんに聞いたので、シェルターに逃げる決心ができました。

妻にはひどい暴力があるが、ペットには暴力がなかった事例である。しかし、女性はシェルターに逃げたら、ペットの世話をする人がいない事が心配であった。また、女性は、ペットが自分の生きがいであるため、ペットと同伴でなければ、逃げる決心がつかない被害者もいる、という事例である。

2. 調査 2

7 施設の DV シェルターの運営者に、「ペットと同伴でシェルターに逃げてくる被害者にどのような対応をしているか」を、インタビュー調査を行った。7 施設のうち、1 施設は、試行的にペット同伴可であった。(表 6)

表 6 ペット同伴可能なシェルター（NPO 法人 A 民間シェルター）の事例

日本では、唯一、ペット同伴可能なシェルターを 2020 年 4 月から試行的にはじめました。ペット同伴可能な、部屋は 1 つだけです。2 つあるうちの 1 つは、不可にしておかないと、動物アレルギーの方とかもいらっしやいますから、1 部屋は不可にしています。2020 年 4 月から 2022 年 11 月までで、4 組の方が利

用していますが、1組目は犬1匹、2組目は猫2匹で、3組目は犬1匹、4組目は犬1匹です。ペットを同伴できるかは、DV被害者にとって、大きいことで、逃げる決断がスムーズになったと思います。被害者の方たちが、シェルターで落ち着いて、自立に向けての準備を始めてもらって、その後、ペット可物件のアパートに生活保護を受けて、再出発を始めています。

ペット同伴不可のシェルター運営者へのインタビュー調査を、逐語的にテープ起こしを行い、質的統合法で、分類分けを行った。(表7)

ペット同伴が不可のシェルターの対応は大表札【 】として、3つの対応方法【ペットは同伴不可と告げる】、【ペットだけ、友人や親戚に預けてきてはどうかと提案する】、【ペットとは離れられないと判断する】が抽出された。シェルターの運営者が【ペットは同伴不可と告げる】と、「連絡がなくなる」という回答が多かった。「ペットを置いて逃げてくる」被害者は、シェルターで、落ち着いた日々を、数日後～1週間程度過ごす、(犬(猫)が心配と言って家に戻ってしまう)人も多くいる。【ペットだけ、友人や親戚に預けてきてはどうかと提案する】と、「友人または親戚、インターネットで預かり先を探し、シェルターに避難してくる。このような被害者のなかには〈ペットに会いたい〉と申し出す人もいれば、〈ペットを引き取れるように、自立に向けて準備〉を始める人もいる。「ペットの一時預かり(有償)」の場所を、シェルター側が紹介することもある。この場合も〈ペットと一緒にないと落ち着かない〉人と、〈気持ちが落ち着いてきた頃、生活保護を申請して、アパート(ペット可物件)を探して自立する〉人もいる。

【ペットとは離れられないと判断する】という、被害者もいて、シェルターの運営者が「ペット里親などの預け先を提案する」が〈ペットは自分の分身であるから、離れられない(高齢女性に多い)〉と言う。そして、連絡がなくなる例が多い。このように、ペットと離れられない被害者のためにも、ペット同伴可能なシェルターが増えていくと良い。

IV. 考 察

本研究は、調査1で、動物虐待が共存している、8名のDV被害者の事例を取り上げた。日本では、DVと動物虐待の関連が、語られてこなかったが、当事者へのインタビュー調査から、日本でもDVと動物虐待が関連していることが、本調査から明らかとなった。

【動物虐待、子ども虐待、DV、動物病院を受診した事例】(表1)の事例A、事例Bは獣医師のところにペットを連れて行っていた。特に事例Bは、獣医師が、動物虐待を疑っていても、飼い主たちが、真実を獣医師に語らなかった。飼い主が「虐待」という真実を隠すため、獣医師も踏み込むことが難しくなっている。台湾でも、動物虐待と対人暴力の間には、強い関連があり、影響を合っていることを指摘している⁹⁾。獣医師は、動物と人間への虐待の両方に遭遇する立場であるが、ほとんどの獣医師が、動物虐待や対人暴力のケースに介入をする訓練を受けていない。そこで、虐待の疑いを報告するか否かについて、戸惑いがある。特に、対人暴力を報告するのは、76.1%の獣医師が、自分の職業と能力を超えていると、台湾の獣医師たちは回答をしている⁹⁾。日本の獣医師も、台湾と同じように、目の前の動物が、虐待による怪我であることを予測はしても、制

表7 DVから避難するとき、ペット同伴が不可のシェルターの対応

【大表札】	「中表札」	〈小表札〉
ペットは同伴不可と告げる。	連絡がなくなる。 ペットを置いて、逃げてくる。	数日後～1週間で、犬(猫)が心配と言って、家に戻ってしまう。
ペットだけ、友人や親戚に預けてきてはどうかと提案する。	友人または、親戚、インターネットで預かり先を探す。 ペットの一時預かり(有償)を紹介する。	「ペットに会いたい」と言い出す。 ペットも引き取れるように、自立に向けて準備をする。 「ペットと一緒にないと落ち着かない」と言い出す。 気持ちが落ち着いてきた頃、生活保護を申請してアパート(ペット可物件)を探し、自立する。
ペットとは離れられないと判断する。	ペット里親などの預け先を提案する	ペットは自分の分身であるから、離れられないという(高齢女性に多い)。連絡がなくなる。

度の不備などで、戸惑いがあることが考えられる。

【動物虐待、子ども虐待、DV、動物病院を受診しなかった事例】(表2)、【動物虐待、DV事例】(表3)では、子どもや孫の前で、動物に暴力を振っている事例である。カナダの調査では、DV被害を受けていた55名の女性のうちの89%が、動物も虐待を受けていたと回答している。また、12%の女性が、ペットが虐待されている姿をみて、離婚を決意したと回答している¹⁰⁾。事例Cも同じように、自分が暴力を振るわれているときではなく、ペットが殺された姿をみて、シェルターに逃げる決心がついたことと重なってくる。事例Cや、事例Dのように、子どもが可愛がっているペットに、目の前で残酷な暴力をふるうことは、子どもの成長に悪影響となる。オーストラリアでは、DV被害を受けた女性の子どもの29%が、「子どもがペットに暴力を振った」と回答し、DV被害家庭ではない女性の子どもでは、1%のみが、「ペットに暴力を振ったのを見たことがある」と回答している¹¹⁾。このことから、動物虐待を見た子どもたちを、将来の加害者にしてしまう可能性が高いことが考えられる。オランダでは、動物への暴力と、対人暴力は相互に関連した問題であることが多いため、この現象をリンクと呼んでいる。動物に暴力を振るう人は、人にも暴力を振るう可能性が高いこと、加害者が、ペットを、配偶者や子どもに恐怖を植え付けるための手先や見せしめにして、動物虐待、子ども虐待、家庭内暴力を行うと指摘している¹²⁾。そこで、家族内で起きている暴力に巻き込まれた、動物や人間の被害者を認識し、予防し、保護するために、学際的な協力が必要である¹²⁾ことを強調している。

【DV、女性がペットと離れられない事例】(表5)のように、ペットは、自分の心の支えであるため、離れなければならないなら、逃げることをあきらめるといふ、高齢の女性が多いことが、インタビュー調査から、明らかになった。カナダでも、47%の回答者が、「ペットを連れてくることができれば、もっと早く、逃げる決断ができたと思う」と回答している。カナダも、ペット同伴可能なシェルターは、数か所のみである。その他は、シェルターが、動物病院、地域住民、動物愛護協会などと協定を結び、女性がシェルターに滞在している間だけ、短期間ペットを預かる仕組みになっている¹⁰⁾。ペットの預かり先を、DVシェルターが探して、何とか、高齢女性をシェルターに一時避難させている。

調査2では、2020年から、試験的に「ペット同伴可能」な部屋を1室、用意した、NPO法人の状況で

ある。遠方からの問い合わせも多数ある、貴重な1室となっている。アメリカのニューヨーク州が行っている、PALS (People&Animals Living Safely)⁸⁾のように、行政が資金を出して、ペットと共に逃げて来れる状態を作っていければ、被害者の逃げ遅れや、暴力のある家に、戻ってしまうことを防げるようになるだろう。

日本では、1か所を除く、すべてのシェルターが、ペット同伴ができない。一番、懸念される状況は、DV被害者から、電話で問い合わせがあったとき、「ペットは不可です」ということを告げると、多くの被害者から、連絡がなくなることである。また、ペットを置いて、逃げてきても、「犬(猫)が心配」と言っただけで、数日間で、元の家に戻ってしまうことは、危険な状況にある被害者を救えていないことである。メキシコの研究では、女性に暴力を振るうパートナーは、ペットを利用して、精神的に支配をして、逃げられないようにすることも指摘している¹³⁾。これらのことを考えると、ペットを置いて逃げてきても、精神的に支配をされているため、「ペットが殺されているのではないか」と考えて、元の家に戻ってしまうことも、十分に考えられる。

現在の日本の状況を考えると、シェルター側が、ペットの預かり先も手配をすることができる状況を作っておくと、DV被害者も逃げる決断ができるようになると思われる。

要 旨

近年、アメリカでは動物虐待とDVが同時発生的に起きていることから、ペットも同伴で、避難できるシェルターが増えてきている。オーストラリアでも獣医師を対象とした研究が行われていて、92.8%の獣医師が、動物虐待であることを認識して、診察をした経験があることが示されている³⁾。日本では、DVと動物虐待の関連性が示された研究がみられないため、調査1では、ペットを飼っていたDV被害者にインタビュー調査を行った。その結果、動物虐待とDVが共存していた8名から、具体的な、動物と、子ども、配偶者への暴力の内容が明らかにされた。子どもが可愛がっている子犬や猫を、わざと、窓から投げたり、床に叩きつけたりする行為の話、ペットを虐待して、脅迫をする話などが、インタビュー調査のなかから明らかにされた。また、8名のうち、2名は獣医師の診察までつなげていた。しかし、2名とも、獣医師の前では、動物虐待が起きている真実を話すことができなかったことが示された。調査2では、DVシェルターの運営者に、ペッ

ト同伴で逃げてくる被害者がいるかどうかのインタビュー調査を、7施設に行った。その結果、1つの施設は、2020年からペット同伴可にしたことが明らかとなった。他の施設では、「ペット同伴はできない」ことを告げると、連絡がなくなることが多く、DV被害者の、その後が案じられることが多い状況であることが明らかとなった。そこで、DVシェルターが、ペットの預け先の情報（動物病院や、ペット里親）も用意して、相談に応じることが、現在の良い方策であることが考えられた。

謝 辞

本研究は科学研究費若手研究 21K17988 で実施した。調査に協力いただいた、皆様に感謝を申し上げる。

C O I

論文投稿に関連し、開示すべき COI 関係にある企業などはない。

引用文献：

- 1) 谷 敏昭. 青少年における動物虐待の実態. 非行少年と対人暴力との関連を中心として. 精神医学 49(7)727-733, 2007.
- 2) 環境省. 動物虐待に関する対応ガイドライン 7-9, 2022. https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data/pamph/r0403a.html
- 3) McDonald SE, Collins EA, Nicotera N, Hageman TO, Ascione FR, Williams JH, Graham-Bermann, SA. Children's experiences of companion animal maltreatment in households characterized by intimate partner violence. *Child Abuse & Neglect*, 50, 116-127, 2015.
- 4) DeViney E, Dickert J, Lockwood R. The care of pets within child abusing families. *International J. for the Study of Animal Problem*, 4, 321-329, 1983.
- 5) Shape M. & Wittum TE. Veterinarian involvement in the prevention and intervention of human violence and animal abuse: a survey of small animal practitioners. *Anthrozoos*, 12(2), 1999.
- 6) Miller. C. Childhood animal cruelty and interpersonal violence. *Clinical Psychology Review*. 21(5), 735-749, 2001.
- 7) Green PC. & Gullone E. Knowledge and attitudes of Australian veterinarians to animal abuse and human interpersonal violence. *Australian Vet. J.*, 83(10), 619-625, 2005.
- 8) Urban Resource Institute and the National Domestic Violence Hotline. PALS (People&Animals Living Safely) Report and Survey: Domestic violence and Pets: Breaking Barriers to Safety and Healing. 2021. <https://urinc.org/palsreport/>
- 9) Chen YH & Huang WH. Pilot Study of Attitudes of Taiwanese Veterinarians and Undergraduate Veterinary Students toward Animal Abuse and Interpersonal Violence. *Animals*, 2022, 12, 1135. <https://doi.org/10.3390/ani12091135>
- 10) Barrett BJ, Gitzgerald A, Peirone A, Stevenson R, Cheung CH. Help-Seeking Among Abused Women With Pets: Evidence From a Canadian Sample. *Violence and Victims*, 33(4), 604-625, 2018.
- 11) Volant AM, Johnson JA, Gullone E, Voleman GJ. The relationship between domestic violence and animal abuse. *J. Interpers. Violence*, 2008, 23, 1277-1295.
- 12) Jagatheesan B, Slegers MJE, Ormerod E, Boyden P. Understanding the Link between Animal Cruelty and Family Violence: The Bioecological Systems Model. *Int. J. Environ. Res. Public Health*, 2020, 17, 3116; doi:10.3390/ijerph17093116
- 13) Rojas DM, Monsalve S, Garcia KL, Medina PM, Oliva AD, Necoechea RR, Garcia RCM. Animal Abuse as an Indicator of Domestic Violence: One Health, One Welfare Approach. *Animals*. 2022, 12, 977. <https://doi.org/10.3390/ani12080977>

Abstract

In recent years, since animal abuse and domestic violence (DV) occur simultaneously in the U.S., shelters that allow pets have been increasing in number. In Australia, an ongoing study of veterinarians, revealed that 92.8% of veterinarians have examined animals after being aware that they were abused. In Japan, since studies have not shown a relationship between domestic violence and animal abuse, Survey 1 conducted interviews with domestic

violence victims who had pets. Subsequently, eight respondents who had experienced both animal abuse and domestic violence revealed specific details of violence against animals, their children, and their spouses. Stories of intentionally throwing puppies and cats, which were adored by their children, out of windows and onto the floor, as well as stories of pet abuse and threats, were revealed in the interviews. In addition, two of the eight respondents were linked to veterinarian visits. However, both indicated that they were unable to tell the truth about the pet abuse in front of the veterinarian. In Study 2, DV shelter operators were interviewed at seven facilities to determine whether any of the victims fled with their pets. The results revealed that one facility made it clear that, from 2020, pets are allowed. The other shelters often lost contact with the victims after they were informed that they were not allowed to bring their pets, and it became clear that they were often concerned about what would happen to these victims of domestic violence. Therefore, it was considered that it would be a good idea for domestic violence shelters to provide information on where to leave pets (veterinary clinics and pet foster homes) and to offer consultation services.